

「農と食」 北の大地から

連載第 205 回

アニマルウェルフェアの啓発に取り組む
岡田千尋さんに訊く今後の方向(前編)

「食品企業の中に『アニマルウェルフェア(AW)の時代がくる』との考え方も増えている」と手応えを感じているのは、動物たちの権利擁護に向けた活動を続ける、認定NPO法人アニマルライツセンターの代表理事・岡田千尋さんだ。犬や猫の保護から始めて20年余り、近年は畜産動物の問題に注力し、虐待事例に対する告発や関連政策の提言、普及啓発、ロビー活動などに取り組む機会が多い。その歩みやAWに対する意見などを訊いた。(2月2日、千葉県内で収録)

認定NPO法人アニマルライツセンター(ARC)
「動物たちの苦しみを効果的に減らす」を目標に、企業や行政などへの働きかけと交渉、政策提言、街頭活動、実態調査や啓発などに取り組む、国内最大の動物の権利擁護団体。1987年に創設され、99年にNPO法人となり、現在に至る
・事務所：東京都渋谷区宇田川町12-3 ニュー渋谷コーポラス1009
・公式サイト：arcj.org/
畜産動物のサイト：hopeforanimals.org/
・Eメール：animalrights@arcj.org ・TEL:03-3770-0720



▲ARCは「ケージフリー」のキャンペーンにも力を入れ、全国各地の店が賛同中(同会HPから)

◀AWポリシーを創った「味の素」は、平飼卵のマヨネーズを開発(同社のプレスリリースから)

「動物福祉の時代がくる」を信じ 無理解な社会で走り続けた20年

犬や猫の殺処分問題きっかけに
攻めの姿勢で活動領域を広げる

——動物問題に関わるきっかけや、
アニマルライツセンター(以下、A
RCと略)との接点を振り返ると?

岡田千尋 高校時代は新聞部に所属し、ペットについての取材をした際に保健所を訪れ、全国で年間70万頭、自分が住む地域だけでも5百頭

以上の犬や猫が殺処分されていることに衝撃を受けました。大学に進んでオーストラリアに短期留学した時に、動物に対する問題意識を持つ語学学校の先生がベジタリアンでいらっしゃった。それまで人権や平和のことに興味を持っていたのですが、より社会的な弱者である動物の問題で多くの人の取り組みが進んでいない分野に注力したいと思ったのが、

最初のきっかけでした。

2001年、卒業後の進路を考えて調べると「アニマルライツセンター」というドンドンビシヤな団体が出てきたので、話を聞きに行っただです(笑)。(初代の)代表の川口進故人が面接をして、「ピーター・シンガー著の『動物の解放』(註)を課題図書にされたので感想文を書き、「いよいよ」となりました。

皮の問題により注力していきましよう」と話し合いました。今から20年前、癌のため56歳で亡くなった代表は労働運動をされてきました。屠畜場の労働問題にも携わり、畜産分野には遠からずで、彼の人生を変えたもののひとつかな、と思いますね。亡くなる前、英国人の活動家が順天堂大学から秘密裏に救出した(動物実験用の)犬を、うちの会が引き取っていた。犬の運搬に協力した川口は自分が逮捕される前にわたしに代表を譲り、その1年後に旅立ちました。会に入ってまだ2年ほどなのに、「岡田さん、大丈夫でしょ?」って。それで引き継ぎましたから、ひどい話ですよ(笑)。

アニマルライツセンターの事務所(撮影：八雲いつか)

(おかだ・ちひろ)1978年、静岡県生まれ。成城大学を卒業後、「アニマルライツセンター」のスタッフになり、調査・キャンペーン・戦略立案などを担う。2003年に同センターの代表に就任。全国の行動ネットワークづくりや、虐待されている動物たちを救うための活動を継続中。近年は畜産動物と水産動物のアニマルウェルフェア推進を大きな柱にすえ、企業や政治家などへのロビー活動などにも注力する。千葉県在住



「毛皮反対」に続き畜産の分野へ
採卵鶏のケージフリーなど追求

——現在のARCは、日本の動物保護団体としては多額の資金を動かす取り組みをしていますね。

岡田 引き継いだころは一軒家などを借り、虐待されていた犬や猫のお世話をし、里親につなぐシェルター(一時的な避難所のこと)の活動をしていたので、寄付が集まりました。わたしのやり方は、犬や猫

をケージに入れたり、繋いだりしないこと。でも、シェルターを続けても根本的な解決にならない。保護よりも、動物に関する政策の提案などに時間を使おうと考えたんです。寄付が大きく減った03、04年ころ、専従スタッフもわたしも普通の会社で就職しながら、ボランティアで回す形に変えました。月1回の定例会議を開き、そこにひとりりくるかどうかからスタート。気がつくとも毎回10人、20人と参加し、皆が担当しながら毛皮反対のデモ行進などに注力できるようになっていきましたね。

——公表された収支を拝見すると、今は畜産関係の比率が高い。

岡田 化粧品、動物実験を止めさせる活動を続けるうちに『日経新聞』が「廃止の方向へ」と報じ、流れが変わったな、と。次に注力したのが毛皮問題です。当時、中国の毛皮産業の動画がリークされ、世界中が「毛皮反対」に動いた。そうした中で04、05年ころに細々と畜産の問題に取り組み始めたんです。ヴィーガン(完全菜食)のレストランをリストアップしたり、講演会でフォアグラの話をしていましたが、理事の一人が海外の情報を教えてく

※註『動物の解放』= 1970年代にオーストラリア人哲学者のピーター・シンガーが出版(人文書院などから邦訳あり)。「すべての動物は平等」「工場畜産を打倒せよ」などラジカルな主張を展開し、肉食を勧めた。種による差別を乗り越える思想として「動物の権利(アニマルライツ)」を説き、世界のAW運動にも影響を与えている。



妊娠豚舎のフリーストール化(日本クリーンファーム(株))



牛を直射日光から避けるために日除けを設置(豪州・ワイアラ牧場)

アニマルウェルフェアの取り組み目標

施策	指標	進捗(2023年6月時点)
妊娠ストールの廃止(豚)	2030年度までに国内全農場 [※] で完了	9.5%
処理場内の係留所への 飲水設備の設置(牛・豚)	2023年度までに国内全処理場 [※] に 設置完了	[牛] 100.0% [豚] 88.8%
農場・処理場への 環境品質カメラの設置	2024年度までに国内全農場・処理場 [※] に 設置完了	[牛処理場] 100.0% [豚処理場・農場] 100.0% [鶏] 20.0%

※当社グループが資本を過半数保有する企業が対象

「日本ハム」は養豚に関するAWの取り組みを紹介(同社の報告書から抜粋)

殖しても放置するという状況でした。家族が内部告発をしてくださったのですが、警察や行政は何もしてくれないからARCに訴えてきたんですね。扱いがあまりに酷く、扉を開けると豚たちが柵に乗りかかって「助けてくれ！」と叫んでいる。肋骨が浮き出ていたり、勝手に近親交配して産まれた子豚が踏みつぶされている、地獄絵図みたいな状態だったの告発しました。結果的には起訴猶予という形での不起訴です。

——行政はもちろん、司法も弱腰ですよ。畜産は聖域になっている。岡田 和歌山の『紀州うめどり』というブランドのブロイラー飼育場で、給料未払いなどで職員が辞めて屠殺ができなくなり、16万羽の鶏が餓死させられた事件がありました。うちは内部の映像を持っていたので訴えて回ったのですが、本当に酷かったです。鶏が死んでいくのも時差があり、早く死ぬる子はまだいいけれど、何カ月か生き残る子は本当に悲劇です。これは行政が告発したにも関わらず不起訴になりました。

島根のケースは、乳牛を虐待する動画を従業員みずからアップした事件で、行政の動きが速く適切に指導

ですよ。伝があるとか、どこかの会議で出会った人とは話し合えても、市民団体からのAWの話は断られてしまう。うちのスタッフが電話でアポを取れるようになったのが19年から。それまでは、しんどい活動だったと思います。

——具体的な企業とのやり取りは。岡田 最初の足掛かりになった企業のひとつは味の素でした。34団体ほどで「企業のエシカル通信簿」という市民運動のネットワークをつくっていて、初年度に食品企業の通信簿を付けたのですが、やり取りを続ける中で16年ころから取り組みを始めてくれたのです。まず、「ラウンドテーブル」という専門家を交えた意見を聴く会を開催。畜産物のトレーサビリティの確保もしようとした結果になった(苦笑)。そうした積み重ねを基に、味の素は畜産物のAWに関するポリシーを出しました。

——他の食品企業はどうですか。岡田 象徴的なのは日本ハムの事例で、13年に「妊娠ストール廃止」の署名運動を始めた時からアプローチしてきましたが、一切話し合いに応じてくれなかった。電話では対応し

されていきました。警察の取り組みも早く、告発の受理も速かった。しかし、農場側は「従業員が勝手にやったことだ」と彼を捨てたんです。それもあって起訴され有罪判決が出た。畜産動物としては初めての事例だろうと認識しています。

——従業員からの相談や内部告発はけっこうあるんですか。岡田 たくさんの方が働き、辞めていく現場にしては、とてもとても少ないですね。本来ならば、海外のように自分たちで現場に潜入しなればとは思いますが、それができない日本人はそういません。

11年にARCは「長期計画」を立てました。畜産の場合、「20年後はどうなっているか」「どこまで認知度を高めたら達成できるのか」を計算しながら、初めて取り組んだものですが、それを見て、「とても、こんな長くできないよ」と心が折れて逃げていく活動家もいましたが、ついてきてくれたのが今、会に残っている人たちです。

味の素など食品企業とAW推進話し合いの実現まで紆余曲折も——HPに「ケージフリー」を応援

でも、会うことはできない、と。そこで、東京都内の大崎(本社所在地)で街頭アクションをしたり、CSRのコンサルティング会社やサステナビリティの専門家、大学の教授を通じて、「ARCと話し合いをせよ」と言ってもらい、ようやく20年に初めて話し合いをして、向こうにも実りがある、と判断してくれました。それで本気の付き合いになった感じで、「次はこんな取り組みをしてほしい」と要望すると応えてくれる関係ができていく、と。その年の暮れには「妊娠ストールフリー」を発表する流れになったのです。

大手飲食チェーンの担当者もいろんな企業に、「アニマルライセンダー」と話し合いをしたほうがいい」と言ってくれたりして、3年ほど前から電話でアポが取れる状態になってきました。

最近「AWの時代がくる」という考え方が醸成され、「5つの自由」を推進する」という食品企業などのHPも増えています。でも、そこから先、具体的にどう取り組むのか、欧米のように達成目標を示せるのかという、残念ですがそこまではいけてませんね。(次号に続く)

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」<https://takikawa-essay.com/> に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。

するコーナーがありますが、食品企業などの変化をご説明ください。

岡田 企業と交渉するため、わたしと別のスタッフが対応できるようにしたのが16、17年ころで、CSR(企業の社会的責任)の担当者にアニマルウェルフェア(AW)を知って

もらう活動を続けてきました。当時、大手企業やCSRの集まりに出てくる人たちは、「将来、アニマルウェルフェアの時代がくる」とは認識していました。そこから具体的に変化していくために交渉を始めましたが、3年くらいは鳴かず飛ばず

れて、日本の状況ははずい、と。わたしは06年くらいに初めてバッテリーケージを見たのですが、衝撃を受け情報発信するようになりました。海外の団体から鶏のバターケージや豚のストール飼育の写真などを提供してもらい、パネルにするなどしましたが、「外国人はひどいね」という反応をされる。当時は、日本中の鶏や豚の飼育を外から見ながら情報を得て、内部告発も時々もらい、畜産分野の運動を進めました。毛皮の問題に関心を持った人が畜産の運動もする、という流れで人が増えていった感じでした。

——その後、活動が本格化する。岡田 11年ころからバッテリーケージと妊娠ストール廃止の運動を形にしていき、「ケージ飼いの卵を食べたくない!」「お母さん豚を閉じ込めないで!」といったキャンペーンを始め、わたしの中の優先順位は畜産動物になっていきました。

——それは、日本の現状が酷すぎる、と思ったからですか? 岡田 畜産は、多くの人が働いていることもあり内部の情報も出てくるし、統計データもあります。掘れば掘るほど酷いことが表に出てきて、

手が付けられていない分野の運動でしたね。(家畜の)数も多いし、消費量も増えているので、誰かが活動しなければならず、優先順位を上げました。海外では大きな問題になっていて、実際に残酷で、(畜産製品が)なくても大丈夫なのに、日本で改善が進まないことにすごく怒りを感じるわけです。有機JASの中に放牧を入れたりされましたが、悪いことをもつとリークする形の市民運動が少なく、成熟していません。

豚や肉用鶏、乳牛の虐待も告発 まだまだ少ない現場からの通報

——最近の事例では、愛媛県の養豚場や島根県の酪農場での虐待事件が明るみに出て、茨城県の畜産施設でも乳牛に対する虐待があった。

岡田 愛媛と島根は、動物愛護管理法違反で告発などを行ないました。茨城のケースを動画で公表したのは海外の団体でしたが、わたしたちが告発準備をしているところですよ。(※その後、国内4団体で告発済み)。

愛媛の事件は19年に起き、35頭の豚たちがネグレクトされていました。(当事者は)親から養豚場を譲り受け惰性で続け、餌をほとんど与えず繁

殖しても放置するという状況でした。家族が内部告発をしてくださったのですが、警察や行政は何もしてくれないからARCに訴えてきたんですね。扱いがあまりに酷く、扉を開けると豚たちが柵に乗りかかって「助けてくれ！」と叫んでいる。肋骨が浮き出ていたり、勝手に近親交配して産まれた子豚が踏みつぶされている、地獄絵図みたいな状態だったの告発しました。結果的には起訴猶予という形での不起訴です。

——行政はもちろん、司法も弱腰ですよ。畜産は聖域になっている。岡田 和歌山の『紀州うめどり』というブランドのブロイラー飼育場で、給料未払いなどで職員が辞めて屠殺ができなくなり、16万羽の鶏が餓死させられた事件がありました。うちは内部の映像を持っていたので訴えて回ったのですが、本当に酷かったです。鶏が死んでいくのも時差があり、早く死ぬる子はまだいいけれど、何カ月か生き残る子は本当に悲劇です。これは行政が告発したにも関わらず不起訴になりました。

島根のケースは、乳牛を虐待する動画を従業員みずからアップした事件で、行政の動きが速く適切に指導

されていきました。警察の取り組みも早く、告発の受理も速かった。しかし、農場側は「従業員が勝手にやったことだ」と彼を捨てたんです。それもあって起訴され有罪判決が出た。畜産動物としては初めての事例だろうと認識しています。

——従業員からの相談や内部告発はけっこうあるんですか。岡田 たくさんの方が働き、辞めていく現場にしては、とてもとても少ないですね。本来ならば、海外のように自分たちで現場に潜入しなればとは思いますが、それができない日本人はそういません。

11年にARCは「長期計画」を立てました。畜産の場合、「20年後はどうなっているか」「どこまで認知度を高めたら達成できるのか」を計算しながら、初めて取り組んだものですが、それを見て、「とても、こんな長くできないよ」と心が折れて逃げていく活動家もいましたが、ついてきてくれたのが今、会に残っている人たちです。

味の素など食品企業とAW推進話し合いの実現まで紆余曲折も——HPに「ケージフリー」を応援

でも、会うことはできない、と。そこで、東京都内の大崎(本社所在地)で街頭アクションをしたり、CSRのコンサルティング会社やサステナビリティの専門家、大学の教授を通じて、「ARCと話し合いをせよ」と言ってもらい、ようやく20年に初めて話し合いをして、向こうにも実りがある、と判断してくれました。それで本気の付き合いになった感じで、「次はこんな取り組みをしてほしい」と要望すると応えてくれる関係ができていく、と。その年の暮れには「妊娠ストールフリー」を発表する流れになったのです。

大手飲食チェーンの担当者もいろんな企業に、「アニマルライセンダー」と話し合いをしたほうがいい」と言ってくれたりして、3年ほど前から電話でアポが取れる状態になってきました。

最近「AWの時代がくる」という考え方が醸成され、「5つの自由」を推進する」という食品企業などのHPも増えています。でも、そこから先、具体的にどう取り組むのか、欧米のように達成目標を示せるのかという、残念ですがそこまではいけてませんね。(次号に続く)